

忘れ物

ある年の氷雪技術講習会の実技で、パーティーの共同食料をまるまる集場所に置いてきた受講生がいた。冬の稜線でテントを張って、食料がない、となればどうなるか……。

別の年の実技ではこんなこともあった。夕食時、盛り付けられたものを、口に運んでいて気がついた。「ん？ 今日ヘルシーだな。野菜鍋か？」

準備は受講生におまかせで、コーチは献立を知らされていない。受講生たちはときどき顔を見合わせながら下を向いている。何か様子がおかしい。「今日の献立はなに？」

問い詰めると、「鶏ごぼろ鍋……の鶏肉抜きです」やっと白状した。要は、鶏肉を忘れたということか。ヘルシーなわけだけ。

こんなのは大勢に影響はない、が……。新緑の季節に、氷雪技術講習会の例になったが、今回は忘れ物の話である。

私の登山

15

ワタシと登山

半田ファミリー山の会代表
洞井 孝雄

どんな山がやりたいんだ？

も受講生におまかせ、だったのだが、「あれっ？ 主食がない！ この袋に入っていたはずなのに」

「だから、集場所、ひとつひとつ共同装備について確認したでしょ？」

「はい、あの時につきり入っているものと思込んで……」

「その、はず、とか、思い込んで、はだめでしょ。まあ、しょうがない。明日の朝のパンや行動食でも食べばいい」

天気もいい、気分的にも余裕がある。それぞれのメンバーのザックからは、行動食や、翌日の食料なんかが出てくる。パーティーとしてのスケール・メリットとでも言うもので、誰かが何か持ってきている。一回分くらいのこととはなんともなる。しかし、鉛玉でしゃぶって数時間、空腹を我慢すれば、下界に下りてくることのできる山

域の話なので、なんとかなったただけなのだ、たまたま。これが積雪期の山中の出来事であったり、まだ数日の行動が残されているような山行の途中であったりすれば、笑っては済まされない。忘れたことを責める、というより、忘れたら大変なことになる場合もあるということに認識すること、自分の責任の重さを自覚することが求められる。

言つべきことを言うのは
苦痛だけれど……

こんな失敗は、何度も繰り返されて、その都度、笑い話のネタになるが、それで済ますわけにはいかない。コトはトレーニングとか講習会とか、学びの場でのことである。出発するときから



鈴鹿も険しい……どこに道があるんだ？



夕食準備 (鈴鹿・佐目峠で)

下山するまで、行動と生活の全部が、受講生が身につけるべき課題だと思っている。岩場で行動できるためのトレーニングと、そういうことなら、そこで行動するスキルはもちろんだが、そのために必要な装備は何か、何のために必要か、

またしても……

四月、合宿前、岩場でのトレーニング山行に出かけたのだが、駐車場に着いたとたん、メンバーのひとりから、「すみません！ ヘルメットとハーネスを忘れました」と申し出が。

「何しに来たんだ？ 普通ならここから帰すところだぞ」と言いつつ、私の装備を貸してしのいだ。

五月、登山学校の実技で。現地の駐車場が発準備をしていたときに、受講生のひとりが、

「ヘルメット、忘れました。今日は自己責任ということで、なして行つていけませんか……」

「そんなわけにいくか！ 自己責任なんて話は通用しない。必要だから装備の中に入っているわけですよ。持っていないことを知りながら登って、事故でもあれば、それは本人の責任だ。じゃ済まない。起こりうる危険を知りつつ、そのままパーティーを出発させるわけにはいかないんだ。ホントならここに残すか、帰ってもらおうか、だな」

で、結局、ここでも私のヘルメットを貸して出発、なんとかなったのだけれど。

スタート前なら対応のしようもある。でも、山に入ってしまったから、忘れ物に「気づかれる」と始末が悪い。県

れを準備すること、携行すること、装着すること、使いこなすこと、それらができるはじめて行動に繋がっていく。食事であれば献立から材料の調達、分担から調理まで一連の流れが「学習の機会」なのだ。つまり、「必要なものを忘れてくる」ということ自体が、もうすでに学んでいない、ということになるのだろう。リーダーもコーチもメンバーも受講生も甘い。だんだん甘くなってきた。

忘れたメンバーに、他の受講生が、「忙しいあなたに、全部、頼んでしまった私たちも悪いのよ。申し訳なかったね」と慰めていたが、お互いの麗しい仲間意識というか、友情というか、それはそれでやつてもらっていい。けれど、パーティーの食料を置いてきた、という事実とは別で、それについては、

連盟の冬や春の合宿でも、ピッケルやアイゼンを忘れた、とか、マットを忘れた、ゴーグルを忘れた、とかいうパーティーの報告も少なくない。スタート時点で、半分遭難したようなものだと思うのだが、それでも当該パーティーは行動を開始し、「行ける」ところまで「行つたのだ」という。積雪、気温、その他さまざまな条件を読んだ上での判断だと言うのだが、結果に助けられているだけのことが多い。果たして、本人は、この忘れ物を、ここまで大変なことだと認識しているだろうか。パーティーのリーダーも、メンバーも、出発を前にして引き返したり、計画を断念するほどの大変な事態だ、などと感じているだろうか。

「だつて行けたもの」「なんとかなったね」で、済んでしまうことが多そうである。こうした結果オーライの受け止め方、判断の甘さが、忘れ物がどんな結果につながるか、という想像力をますます鈍化させる。

それから二週間後、同じく登山学校の実技で、一泊二日のテント山行を実施した。

一日の行程を終えてテントを張った。鈴鹿の深奥部、登山道から離れた静かな別世界でのテント生活も楽しい。みんなで夕食作りが始まった。

実技山行なので、準備段階から食事の献立、材料の買い出し、当日の調理

きちんと指摘しなければならぬ。

「どういう事情があるにせよ、自分で引き受けた以上、責任は果たしてもらわねばならない。たとえ、忙しかろうと、それは忘れていいという理由にはならない」ということである。

ここ二か月の間に立て続けに、こういう場面に出くわした。こんな場面はいっぱいあるんじゃないだろうか。ここでは、当面どうするか、という対処が求められるのだけれど、本人にもそれがどういふことか、真剣に考えてもらうような対応がなされているだろうか？

言うべきことを言うのは苦痛である。でも、あえて、それを言うことが大事だし、それを言う、言われる、ことができるのが山岳会だと思っただけ

コンパスは壊れる (ことがある)

コンパスの話である。登山学校の実技ではまず登山口で地図とコンパスを取り出して整置するところからスタートする。地図に引いた磁北線にコンパスを合わせて、自分がこれから進もうとする方向を把握する作業だが、使いやすいのは磁針を取めたカプセルと進行線の刻まれたプレートがひとつになったOL (オリエンテーリング) 用のコンパスである。昨今はほとんどの登山者がこうしたコンパスを使っているのだけれど、あまり壊れた、という話を聞かない。多くは、磁針の入ったカプセルに入っている液体に泡ができて、磁針が正確に (あるいはスムーズに) 動かなくなったときに寿命かもしれないのだけれど、先日、液漏れしてしまって、針が動かなくなったコンパスに気づいて立ち往生している受講生がいた。私自身も数年前、OLの最中に、コンパスがバラバラになってしまったことがある。持ち主と同様、老朽化による劣化だろう。それほどあることではないのだけれど、コンパスも半永久的なものではない。山に出かけるときにはきちんと状態を確認したうえで携行することをお勧めしたい。